

実践女子大学所蔵『源氏物語』梗概書関連書誌

上野英子

一 はじめに

周知のごとく、『源氏物語』はその普及に伴い、さまざまな形での権威化がはかられていったとされている。例えば鎌倉時代、宮廷貴族社会に於ける歌学の師範と目された御子左家の藤原俊成が「源氏みざる歌詠みは遺恨のことなり」（『六番歌合』判詞）と発言し、これがやがて『源氏物語』をして和歌学びの人のための推薦図書たらしめたこと。あるいは室町時代の大文化人であった一条兼良が、摂政太政大臣や関白などの要職にありながら『源氏物語』の注釈書を執筆し、『源氏物語』をして「我が国の至宝なり」（『花鳥余情』料簡）と宣言したことなどは有名であろう。

また『源氏物語』の主題についても、〈男女のさまざまな恋愛をきれいな包装紙に包んで描いただけのつくり話などではない、実は読者をして世の無常を悟らしめ、仏道への機縁を図ったものなのだ〉とか、〈言葉の裏に深い意味性をこめ

た、史記の筆法に拠っているのだ」とか（物語の深層には老莊思想が流れているのだ」といった意味づけがなされ、遂には、かかる名作を著した作者自身についても（観音の化身説）、あるいは逆に、（狂言綺語を用いて大勢の読者を道に迷わせた罪により、今も地獄で苦しんでいる」といった話まで誕生したわけである。こうして『源氏物語』は単なる娯楽作品から、文化人であるための必読教養書、さらには物語世界を標榜しながら深い真理を会得できる我が国の至宝として定着していった。

しかしながら、帝で四代およそ七十五年間、五百名以上の登場人物をかかえるこの長大な物語を入手し、かつ読み切ることが容易でなく、またたとえ読んだとしても一読した程度では掌握しきれないという切実な現実も一方にはあって、その結果、『源氏小鏡』に代表されるような『源氏物語』入門書としての梗概書や簡略本が編纂されるようになったようである。そしてこれらの梗概書や簡略本は、難解な原文を読まなくとも『源氏物語』の世界が理解でき、『源氏物語』に精通しなくとも、ツボを外さず物語世界を踏まえた和歌や連歌の詠出を可能にしてくれるものとして、大いに享受された。

この傾向は近世期、印刷技術の導入による読者層の拡大に伴って、更に拍車がかけられる。梗概書は版をかさね、婦女子にも読みやすくということと絵入のものが登場したり、巻名を詠み込んだ発句を添えたりといった具合に、さまざまな趣向が凝らされ、ついには俗語訳まで登場するなど、そのバリエーションも豊富になっていったからである。

一方視点を変えれば、梗概化するということは、『源氏物語』という大部な作品世界をどのように捉えて、それを再構築するか」という営みにほかならないわけで、梗概書執筆者の中には『源氏小鏡』以来の定型的な捉え方を踏まえつつも、時にその枠を超えて自らの個性を伸張することもあったようである。また挿絵は物語世界を視覚的に把握する格好の手段であるが、画題あるいは絵の中の道具立てなどに定型と破定型の動きが見られるようである。巻名を詠み込んだ歌や発句、巻の主題を詠み込んだ歌などもしかり。

本稿ではこれらの資料の中から本学が所蔵している20点を「源氏物語梗概書関連資料」として一括し、その書誌を報告することにした。なお本稿で取り上げる資料は下記のように分類できるようにある。

まず南北朝頃に作成され、以来、手頃なダイジェスト版としてまた連歌用書として近世までもてはやされた『源氏小鏡』だが、本学には写本1点と刊本7点があり、後者は『絵入本源氏物語考』（日本書誌学大系53 昭和62年青裳堂）所収「絵入源氏小鏡考」に従うと、以下のように分類できる。点線以下の囲み文字が本稿での通し番号である。

二、整版正文本 慶安四年刊秋田屋版三卷三冊：②・③

無刊記正文大本三卷三冊：④

三、整版絵入本 第一類 上方版大本（明暦三年刊安田十兵衛版三卷三冊）：⑤

第二類 上方版小本（寛文六年版小本三卷三冊）：⑥

第三類 江戸版大本（乙卯弥生吉辰鶴屋版三卷六冊）：⑦

第四類 江戸版中本（文林堂須原屋版三卷三冊）：⑧

また小鏡につづく詳細な梗概書として、室町時代（永享四年）今川政範によって記された『源氏物語提要』（⑨・⑩）と、近世、北村湖南が出版した『源氏物語忍草』（⑪・⑫・⑬）がある。また『小鏡』を更に簡便化したという『源氏鬢鏡』（⑭）、『提要』を簡略化したという『源氏大繩』（⑮）の他、女性論や男性論などのテーマ毎に物語世界の全貌を捉えようとした『源氏物語紐鏡』（⑯）、挿絵を中心にこれに簡単な梗概等を付した『絵本源氏物語』（⑰）、梗概を俗語訳でまとめなおした『若草源氏』（⑱）『紅白源氏物語』（⑲）がある。

二 凡例

(一) 各資料は、見出行に通し番号・書名・所蔵先略号・請求番号(あるもののみ)を記した。所蔵先略号は以下の通り。
常磐松：実践女子大学図書館常磐松文庫・黒川：同黒川文庫・山岸：同山岸文庫・

近世資料：同近世資料・文芸：実践女子大学文芸資料研究所

(二) 書誌報告の項目は、写刊の違いや各資料の状況によって若干の相違がある。

(三) 寸法は表紙寸法・題簽寸法・内郭その他、いずれも縦×横、裱單位の寸法である。また片面行数×一行字数は、原則として本文第二丁目の第一行目(二行目が内題ならば次の行)で計測した。

(四) 同一書名の資料が複数点数ある場合、それらに共通する序跋等については、最初に掲載した資料でその翻刻を紹介することにし、以後の資料については「有」あるいは「無」とのみ記すことにした。これは表記法や清濁など本文に異同がみられる場合も同様である。

(五) 原資料の字句をそのまま翻刻する場合、引用した文章には「」印を被せた。その際、見せけち・補入・割り注・角書きなどは次のように処理した。

「ゆ」(朱) … 「け」を朱筆で見せけちにしてあるという意味。

「。御」 … 「御」を補入したという意味。

「ノ」 … 「」内が小双行部分で、「ノ」で改行されたという意味。また「」を外し、活字の級数を小さく表示した場合もある。

(六) 序跋等の翻刻に際しては、一部私に句読点を施したのもあるが、その場合には翻刻末尾に(※句読点稿者)と断つた。

(七) 序跋・識語等の翻刻に際し、漢字は原則として通行の字体を用いた。

三 書誌

◇ 源氏小鑑(文芸)

冊数 木箱入り(題字「源氏小鑑」)。写本一冊。

装丁 袋綴(四孔・糸黄緑色)

表紙 寸法二八、七×二二、四。黄色地に缥色牡丹唐草模様布表紙。

外題 表紙中央に朱色地に銀泥細画入短冊題簽貼付。題簽寸法一八、七×四、四。題字「源氏小鑑」。

内題 目録題「源氏のかか、み／もくろくの次第」。本文部の巻首題「宇治十帖」。尾題無し。

見返し 前後ともに、金箔地に銀箔散らし。前後に遊紙各一丁。

本文料紙 楮紙。

構成 「目録」と梗概本文。序跋なし。

書式 片面一二行×一行二五字内外。全冊一筆。和歌は改行二字下げ二行分かち書き(和歌の後にそのまま地の文が続く)。「源氏寄合」も地の文にそのまま連続。本文には稀に振り仮名・声点・傍注等が入る。各巻の本文は巻名ではじまるが、巻序の記載はない。但しならびの巻のみ、巻名の上に「ならび」と記述。また「匂兵部卿宮」の巻名(本文「にほふ

ひやうぶ かほるともいふべし」は別行をたてることなく、前後の梗概本文中に埋没している。巻首題であることに気づかなかつたものと思われる。

奥書・識語・印記 無。

極札 極札添付。「徳大寺内大臣公維公

源氏小鑑一帖

印」(三代古筆了仲か)

丁数 全九七丁(うち二丁遊紙・二丁目錄)。「御幸」の本文なし(底本以来の脱文か)

備考 古本系。但し、次に示す「野分」のように、紫上を垣間見たことに主眼を置いた独自の本文もある。

「ならひ野分のわき

此まき野分のわきといふ事、ころは八月、おほかせふきてさはかしく、ところ／＼のついちすいかきかわらなとふきちらして、すさましくおそろしかりしなり。秋の大かせをのわきといふなり。さてげんじの御子こゆふきりの大しやう、そのころはいまた中將しやうにておはしましけるころなり。むらさきのうへ上うへへまいり給へは、みすをかせのふきあければ、御おもかけほのかにみえければ、春のあけほの、かすみのまより、おもしろきかばさくららのさきみたれたるをみる心ちす。あちきなく見たてまつる風の、さはぎはかりをとふらひ給ひて、つれなくたちかへり給ふ。心やましけなり。わりなき御おもひなり。

大かたにおぎのはすくる風のをともうき身ひとつにしむ心ちして とひとりこちけり。かやうの心をつくへし。」(※句読点稿者)

② 源氏小鑑(山岸八四七)

冊数 一帙刊本(整版) 三冊揃

装丁 袋綴（五孔・糸後綴藍色）。

表紙 寸法二七、三×一八、七。縹色空押（菱卍地に草花）原装紙表紙。

外題 表紙左肩に子持梓刷題簽貼付。題簽寸法一八、一×四、〇。題字「源氏小鏡 中（下）」（上冊は題簽剥離。その痕に「源氏小鏡 上」と墨書）。

内題 目録題上卷「源氏目録」。同中卷「源氏目録卷中」。同下卷「源氏目録卷下 宇治十帖」。梗概本文中の巻首題下巻「宇治十帖」

尾題 無。該書では上巻に「小鑑一終」の尾題は確認できず。

版心 上巻目録「小鑑卷一 一」。同本文「小鑑一 二（〜五十七）」（最終丁五十八を見返しとする。但し版心なし）

中巻目録「小鑑 卷中 一」。同本文「小鑑卷中 二（〜五十二）」（最終丁五十三を見返しとする。但し版心なし）
下巻目録は版心なし。同本文「小鑑卷下 二（〜三十終）」（最終丁三十を見返しとする）

本文 匡郭なし。片面一行×一行二〇字前後。和歌は改行一字下げ二行分ち書き。振り仮名多し。

跋文 「夫生死無常の雲あつく、本覚真如の月出かたし。無明の酒にゑひて、衣の裏の玉をしらす。おく／＼万胡に
もうけかたき人界に生る、事、梵天より糸をおろして、大海の底の針の穴をつらぬくよりもうけかたし。又仏教にあへる
事は、一眼の亀の浮木にあへるかとし。今かゝる世にあひ奉る事をは悦はすして、かたちのよきにふける妄想、天た
うの花ことはにほたされて、あひよくのきつなかく結ひ解事更になし。されは無常の序の声は耳に近付とも、世路の
いとなみに聞えず。雪山の鳥は日々啼とも、栖を出て忘れぬ。されは宮もわら屋もはてしなけれはと、心をやり衣を
すみに染。をんあひふなうたんの家をいてき、おんにうむるの心さし深くして、真実のほうをんしやのすかたなり。諸
行無常は天に上る橋、是生滅法はあひよくの川を渡る舟、生滅の已は劔の山を越る車、寂滅為楽は成仏の間也と

覚る。願念の窓の中には心を三明の月にかけて、座禪の床の上には眉に八字の霜をたれさらんとおもひて、はやく世をいとひ給ふへし。しからずはかゝる狂言綺語の物語にたつさはるとも、しんしつのふかき心をよくしりなは、なとかはさとりをえさらん。心を直にして情ふかければ、慈悲誠にしてかんなうすへし。大和歌は是又大しよしやうの仏をつくるなり。されはそれにひかれて成仏うたかひなしといふ也」(※句読点稿者)

丁数 上巻の印刷丁は五七丁半。但し目録と本文の間に山岸氏が、書陵部蔵「源氏小鑑」の巻頭部分を模写した一丁を独自に追加している。中巻五二丁半。下巻二九丁半。

刊記 下巻の後見返し、跋文のあとに「慶安四_甲曆仲秋吉辰／秋田屋平左衛門刊行」(四周子持粹)

識語「三冊之内／青風軒印」「昭和竜集戌辰大簇三／西京にて求 河原町通其中堂／図書寮蔵源氏の注小か、みに対校ス岸廼舎」

「以図書寮本源氏注小鑑校合矣 与版本有異同／又以寮本補卷首一枚」(朱)

「図書寮写本亦同系而本文稍(有)出入／今模写卷首一枚 処々以朱校合焉／(後二「源氏の注小か、み」影写シタレドモ人ノタメニ借り失ハレタリ、昭和二十二年三月記之。)

旧蔵印「山岸文庫」(複製朱長方印) ほか

備考 上巻目録中に「十五 權」の行が脱落(本文中には「十五 權」として印字)

③ 源氏小鑑(黒川七二)

冊数 一帙刊本(整版)三卷合一冊。

装丁 袋綴(五孔・白糸)。

表紙 寸法二七、四×一八、五。縹色菱卍地に草花空押紙表紙（その後、表紙全面に「明和六年」と大きく墨書する）。

外題 表紙左肩に金泥霞流し雲紙書題簽貼付。題簽寸法一、二、六×三、〇。題字「源氏小鏡 上中下 全」

内題・本文・跋文・刊記・備考 前項No 2（山岸八四七）に同じ。

尾題 「小鑑一終」（上卷五十八丁ウ）

版心 上卷（目録「小鏡卷一 一」本文「小鑑卷一 二（～五十八終）」）。中卷（目録「小鑑卷中 一」本文「小鑑卷中 二（～五十二）」）※最終丁五十三に版心なし。下卷（目録に版心なし・本文「小鑑卷下 二（～二十九）」）※最終丁三十

を見返しとする。

丁数 印刷丁は上卷五八丁・中卷五二丁半・下卷三〇丁。

旧蔵印 「物語」（单辺朱丸印）「黒川真道蔵書」（单郭朱長方印）

④ 源氏小鏡（常磐松九一三、三六）

冊数 一帙刊本（整版）三冊揃。

装丁 袋綴（四孔・上冊のみ後綴紺糸・中下冊白糸）。

表紙 寸法二七、七×一九、一。空押（菱繋ぎ地に草花）原裝丹表紙。

外題 表紙左肩に四周子持梓刷題簽貼付。題簽寸法一八、七×四、一。題字「源氏小鏡 上中下」。

内題・本文・跋文・備考 No 2（山岸八四七）に同じ。

尾題 「小鑑一終」（上卷）

版心 上卷（目録「小鏡卷一 一」本文「小鑑卷一終 二（～五十八）」）。中卷（目録「小鑑卷中 一」本文「小鑑卷中 二（～五十二）」）※最終丁五十三に版心なし。下卷（目録に版心なし・本文「小鑑卷下 二（～二十九）」）※最終丁三十

二（五十三終）。下卷（目録「小鑑卷下 一」本文「小鑑卷下 二（三十終）」）。

丁数 印刷丁は上卷五八丁・中卷五三丁・下卷三〇丁。

刊記 無。

識語「閑哲」「閑鉄」（墨書）他多数。また朱引き・墨筆による校合書入れ等も散見。

旧蔵印「□慶」（単郭朱正方印）。

⑤ 絵入源氏小鏡（文芸）

冊数 一帙刊本（整版）三冊揃。帙題簽の題字「源氏小鏡明曆三年刊三冊」（手書）

装丁 袋綴（四孔・糸後綴紺色）。

表紙 寸法二七、〇×一九、七。縹色空押（菱繫地に草花）紙表紙（虫孔補修済み）。

外題 表紙中央に四周子持梓刷題簽貼付。題簽寸法一八、五×三、三。題字「入絵源氏小鏡」上中（下卷は題簽が一部損

傷）。表紙右肩に「今尾蔵書」（単郭朱正方印）を捺し、同家の書票を貼付。

内題 目録題上卷「源氏目録」、同中卷「源氏目録卷中」、同下卷「源氏目録卷下 宇治十帖」。本文下卷の卷首題に「宇

治十帖」

版心 無。隠し丁付の有無は不明。

本文 匡郭なし。片面一三行×一行二〇字内外。和歌改行二字下げ二字分かち書き。

跋文 有。

丁数 上卷五七丁・中卷五五丁・下卷二九丁。

挿絵 上巻二〇図・中巻二四図・下巻九図。挿絵を四周単郭（内郭二〇、四×二二、九）の中に描く。この匡郭は片面一三行書きのうちの七行分を絵にあて、三行分を本文に残す形式のものが主だが、稀に挿絵匡郭の上辺一部を切つて本文にあてるといふ、変則的な形の挿絵もある。

刊記 「明暦三年町仲秋吉辰／洛陽三条寺町誓願寺前／安田十兵衛開板」（下巻二十九ウ）
識語 無。

旧蔵印 「象□」（単郭墨正方印）「田中」（単辺朱小型丸印）「今尾蔵書」（単郭朱正方印）他
備考 上冊目録に槿の項が脱落しており、そこに「十五 朝かほ」と墨書。梗概本文中には。「十五 あさかほ 槿」と印字。

⑥ 源氏小かゝみ（文芸）

冊数 一帙刊本（整版）三冊揃。

装丁 袋綴（四孔・糸茶色）。

表紙 寸法一五、四×一〇、八。紺無地紙表紙。

外題 表紙中央に白地雲母引書題簽貼付。題簽寸法一〇、五×二、七。題字「源氏小かゝみ 上（中・下）」
内題・跋文 山岸八四七に同じ。但し跋文は漢字仮名表記法の相違等あり。

尾題 無。

版心 上巻「小 ○ 上 ○ 一（〜七十九終）」。中巻「小 ○ 中 ○ 一（〜六十九）」（中巻は落丁本）。下巻「小 ○ 下 ○ 一（〜三十七終）」。

本文 四周単郭。内郭一一、四×八、二。片面一一行×一行一七字内外。和歌は改行一字下げ二行分から書き。

丁数 上巻七九丁。中巻四九丁（一六・二六・二七・二八・三二・三三・三六・五三・五六・五九・六六・六八丁欠）。
下巻三七丁。

挿絵 上巻二〇図。中巻九図（落丁本）。下巻一〇図。挿絵も本文と同じ四周単郭（内郭同）。片面全体に一図を描く。構
図は明暦三年本に類似するが、完全に同一ではない。

刊記 「寛文六^年林鐘吉日」（下巻三七ウ）。

旧蔵印 無。

識語 無。

備考 上巻目次に「十五 權」が入る。中巻は落丁本。

◇ 絵入源氏小鏡（山岸八四六）

冊数 一帙刊本（整版）三巻合一冊揃。

装丁 袋綴（四孔・白糸）。

表紙 寸法二七、〇×一八、〇。縹色無地紙表紙。

外題 表紙中央に子持粹刷題簽貼付。題簽寸法一八、〇×四、二。題字「入繪源氏小鏡」「上中下／合冊」「上」「下」「合
冊」は書入れか）。

内題 該書は一丁才が後補扉。扉題「源氏小鏡」上中下「合本」「本文慶安刊本同焉 山岸印」。同ウが上巻目録。二丁才が

中巻目録。同ウが下巻目録。これらの目録は上中下の各目録を切り、貼り直して巻頭に一括したもの。目録題「源氏目録
卷上」「源氏目録卷中」「源氏目録卷下 宇治十帖」（尾題無）。

版心 無。隠し丁付の有無は不明。

本文 匡郭無。片面一五行×一行二九字内外。和歌は改行一字下げ一行書き。但し中には和歌の肩に鉤記号を付し、地の文にそのまま続けたものもある。

跋文 有。

丁数 扉と目次で二丁・上巻三九丁・中巻三七丁・下巻一九丁、計九七丁。(二丁才扉・同向上巻目録・二丁才中巻目録・同向下巻目録・三丁才〇四〇丁向上巻本文・四一丁才〇七七丁向上巻本文・七八丁才〇九七丁才下巻本文・同才〇同ウ跋文)。

挿絵 上巻一八図。中巻一七図。下巻九図。挿絵は全て四周単郭(内郭二二、一×一六、九)で、片面に一図ずつ描く。

刊記 「訶弥生吉辰／
江戸大伝馬町三丁目
鶴屋嘉右衛門開板」

識語 「□間久寿書写／藤印」「乙卯八元和九年ト延宝三年ナリ」「昭和四年応鐘望繕修焉 岸廼舎」

旧蔵印 「山岸文庫」(複郭朱長方印)「山岸」(単辺朱小型丸印)「岸廼舎」(複郭朱長方印)「香川淡涼書籍」(単郭朱長方印)「□恒閣図書」(単郭朱長方印)。

備考 本文中の巻序「三 総角」を「二 総角」と誤植(目録では「三 総角」)。挿絵の数は上方版よりも大幅に減少し、構図も「絵入源氏」「十帖源氏」からの流用が目立ち、かつ挿入場所も適切を欠く場合がある。「おさな源氏」(寛文十二年松会版)の挿絵と同じか。

⑧ 源氏小鏡(常磐松 913、365 / G 34)

冊数 一帙刊本(整版)三冊揃。

装丁 袋綴（四孔・白糸）。

表紙 寸法二二、五×一六、二。紺無地紙表紙。

外題 表紙中央に白地刷題簽貼付。題簽寸法一八、一×三、六。題字「源氏小かゝみ 上」「源氏小鏡 中」「けんし小鏡 下」

内題 各冊目録題「源氏上巻目録」「源氏小鏡卷中目録」「源氏小鏡卷下目録／宇治十帖」。下巻巻首題「宇治十帖」。

尾題 無。

版心 無。

隠丁付 のどに「源氏上四十二終」「源中四十二終」「源下二十二」等の隠し丁付を確認。また中巻と下巻は目録を除外して、丁付を打つ。

本文 無辺。片面一四行×一行二五字内外。和歌は改行一字下げ一行書き。「源氏寄合」部分は改行一字下げ。

跋文 有。但し漢字仮名表記・振り仮名等若干の異同あり。片面一四行×一行二五字内外。

丁数 上巻四二丁（最終丁ウは後見返しに貼付）。中巻四三丁（目録一丁を最終丁ウは後見返しに貼付）。下巻二三丁。

挿絵 上巻二〇図・中巻二五図・下巻一〇図。挿絵はすべて四周単郭（内郭一九、一×一四、三）で、片面全体に一図を描く。

刊記「江府文林堂 日本橋南巷丁目 須原屋茂兵衛改正」（下巻）

旧蔵印 「観意」（複郭朱長方印）「本山文庫」（単郭朱正方印）

識語 無。

備考 上巻目次に「十五 權」を欠く。

⑨ 源氏物語提要（黒川八一）

冊数 写本六冊揃

装丁 袋綴（四孔・白糸）

表紙 寸法二六、九×一九、〇。黄色無地紙表紙。

外題 表紙左肩に白地書題箋貼付。題箋寸法一七、七×三、二。題字「源氏物語提要」。

内題 巻首題「源氏物語提要巻第一（〜五）」「源氏物語提要巻第六／宇治十帖」。自跋本文中「源氏物語提要」。

構成 発端（七丁）・本論・自跋

分冊情況 第一冊目（「発端」「桐壺」）〜「花宴」。第二冊目（「あふひ巻」）〜「総合巻」。第三冊目（「松風巻十三」）〜「常夏玉かつらの豎のならひ 巻四」。第四冊目（「炬火篝統松 共二かゝり火／玉かつら豎のならひ 巻五」）〜「わかなの下」。第五冊目（「柏木巻二十一」）〜「竹川にほふ宮のならひの巻二」。第六冊目（「宇治十帖／橋姫」）〜「夢浮橋」・自跋。

書式 発端は片面八行×行二〇字内外。本論部分は片面一〇行×行二一字内外。和歌は改行二字下げ二行分ち書き。改行して地の文が続く。自跋は片面一〇行×行一八字内外。

自跋 「われと性おなしき人のむすめを、むつきのうちより養育て、老のかたらひとしけるに、或時我にいへる事ありて、源氏物語抄物世におほし。しかれとも事しけくして、あるひは耳とをなるあり。又事かけたるあり。ねがはくは詞のおもしろさまき／＼、歌のかす／＼、又其人にまかせ、こと葉をつねにし事をあつめてかきつゝり、源氏物語提要と名づけて六十帖の名をかり六帖にして是を送る。見る人あさけりあらんかし。他見あるましき也。永享四年八月十五日 上総介範政在」（※句読点稿者。私に施した傍線部「其人」の下、「の名ともしらしめよといたくこふ故に望」が脱落か。）

旧蔵印 「物語」(単辺朱丸印) 「黒川真頼蔵書」 「黒川真道蔵書」(共に単郭朱長方印)
備考 本文は流布本系。

⑩ 源氏物語提要(黒川八二)

冊数 写本七冊揃

装丁 袋綴(四孔・白糸)

表紙 寸法二五、九×一八、〇。縹色円文鳥唐草文様空押表紙。

外題 表紙左肩に白地具引き書題簽貼付。題簽寸法一七、六×三、五。題字「源氏物語提要 一(七下)」。

内題 巻首題「源氏物語提要」。尾題「五十四帖終」。自跋本文中「源氏物語提要」。

構成 發端(三丁半)・本論・自跋・奥書

分冊状況 第一冊目(「發端」)「桐壺」→「紅葉賀」。第二冊目(「花宴」)→「絵合」。第三冊目(「薄雲」)→「炬火」
簞
続松 ともにかゝり火」。第四冊目(「御幸」)→「柏木」。第五冊目(「横笛」)→「竹川匂の宮のならひの巻」。第六冊目
「橋姫」→「東屋」。第七冊目(「浮舟」)→「夢浮橋」・自跋・書写奥書)。

書式 發端・本論部・跋文ともに片面一〇行×行二九字内外。和歌は改行二字下げ一行書き。改行して地の文が続く。
自跋 有(※但し脱文なし)。

奥書 「慶応三卯年十二月日 藤沢英規」(朱書)(※本文中にみられる訂正の朱筆と同筆か。)

旧蔵印 「物語」(単辺朱丸印) 「黒川真頼蔵書」 「黒川真道蔵書」(共に単郭朱長方印)

備考 「發端」の末尾に改行二字下げで次の文章が加わる。「何れの御時と書る事当代延喜帝に比し奉る事をは、かる。惣

して卷々冠となる詞皆々如此。今の事を昔の様に書くこと、物語のならひなり。莊子に北溟有魚、此筆法なり。」これは桐壺卷の一文が混入したものらしく、桐壺卷の当該箇所には「発端に何れの御時にかと書出す事、物語のならひなり。又何の時の物語のやうに書くこと余情かきりなし」とのみ記す。また桐壺卷の「桐壺更衣」のくだりに、「帝更衣を御寵愛あれは、弘徽殿嫉給ひて、更衣の通ひ給ふ路にあやしき不浄をまきちらり（見消ち朱）し裾をけかし廊下の戸などをさし路にまよはせなとし給へとも、更衣は色にも出し給はず。帝はかなき事に覺して御曹司をかへ、御殿の近所へ移し給ふ」を入れるなど、流布本系を基にしながらも所々で本文を増補する。なお増補部分の筆跡は本行と同筆。

◆ 源氏物語忍草（山岸三三〇七）

冊数 一帙写本二卷合一冊

装丁 袋綴（四孔・糸黄緑色）

表紙 寸法二〇、八×一三、二。香色地に金砂子散らし紙表紙。

外題 書名なし。上巻表紙に「上巻／此主文字」「共二印（山岸）」「下巻／此主文字」と墨書。

内題 「忍草」（山岸氏識語）

本文料紙 三椶紙

構成 本論・跋文・山岸氏識語

書式 片面一三行×行三六字内外。巻毎に章段をわけ、見出しには「うつせみ は、き、のたてのならひ」源氏香図
 うつせみの身をかへてける木のもとになを人からのなつかしきかな」のように、巻名・並び・源氏香図・各巻代表歌一首をおく。和歌は改行一行書き。

跋文 「此物かたりは仕明ノ上三「人王ト重本書キ」 六十六代のみかと一てうの院のきさき、のちには上とう門院と申奉る、その御うちの女房蓬紫式部といひし女の作也、ひかへの有事になそらへてなき事をつくれり。八十二代のみかと後鳥羽の院の御時、世にもてはやしけるとなん、式部親はつ、み中納ツマ為時といふと也、小鏡無外題十帖源氏など、こののは艶になまめきて、其道にうとき人のためにはくもりし鏡のかけあきらかならぬ心地すれば、よるのにしきとやいはん。其心の行やうにちりはかりつ、書付よ、とせめてきこへ給ふめるは、おのへ氏の何某也、いはけなきそのかみより此物かたりに執シふかくて、辛ふして求出たれと、いましめ給ふ心を師とせん外には、いかにもとふへき人もなし。つみなくて配所の月は心有人のおかしうする事なれと、木のはし石のかけにひとしき身には、なかむるかひなく心にくもり、春ののとかなるそらにあらそふいとゆふをくりかへしては、夏ころものうすきひとへに心をいたましめ、秋風にはころふるふしはかまならねと、きり／＼すのいさめにつゝりさすわさのいとなみに、いたつらにくらす時しもなければ、心やすくうちみるほどさへ有かたけれど、さりとて心つくしぬるなくさめには、もてる針の行衛をわすれて、こゝろさしふかく染てしをりければ、きへあへぬ雪を花とみる程のひか心得は、心へぬにしもあらねは、さはともいなひはてん、一まき／＼の中のことたる所はかりを、九ツのうしの一すしの毛、大うみをこき行あまの小船のかちのひとしつくなれと、十といひて五ツ、三ツか一つの数なれば書付し反古百にあまれり、かくてはこよみの心地こそすれ、今すこし大きに書てみせよ、との給ふ、十とせ此かたあつしう成ぬ、そのこ、ちむねさはきてふるへは、み、すがきいと、せんかたなけれど、かの人の身のわさに、やまいもなかは過てさはやき、道、しき物かたりには、まかれる心もなをくおほゆれて、いかてをろかに思ひきこえん、色見えぬ心をいにかへてたにこそみせ奉り給ひけれ、われも此人のためにはなきてを出しても、は、かりはちぬへき事かは、と思ひをこして、わな、きつけたるすみの跡、いふかひなきもしつかひは、きくかひなきことのはつ、きには、よくゆへつきてほゝゑまる、たゝひとり軒のつまにおふる草と見給へ、それをこそ此名にもかり侍るものならし

拾穂軒（※文末に北村季吟の号を記す。句読点は稿者。）

識語 「（。此本ハ）忍草也 大正五年示佐々醒雪翁、々曰不明書。明後知忍草也。源氏物語并の事在 東海談云々。」
印記 「□」（白文・墨小型丸印）「山岸文庫」（複郭朱長方印）
備考 両冊とも後ろ見返しに長文にわたる書入れ注有り。

◆源氏物語忍草（山岸一一二〇）

冊数 一帙刊本（整版）五冊

装丁 大和綴（八孔・糸小豆色）

表紙 寸法二六、二×一九、四。白地に二葉を描き金箔銀砂子ちらし模様（檀紙）表紙。

外題 表紙中央に卵色刷題簽貼付。寸法一七、六×二、九。題字「源氏物語忍草 一（〜五）」。

内題 目録題「源語忍草卷之一（〜五）」

版式 無辺無界。片面一〇行×一行二〇字内外。和歌は改行二字下げ一行書き。本文中に読み仮名・振り漢字多し。

版心 丁付のみ。卷一（序文「〇 一（〜二）」・卷名目録は丁付なし・本論「〇 一（〜四十七）」）。

卷二（卷名目録は丁付無し・本論「〇 一（〜四十三）」）。

卷三（卷名目録は丁付無し・本論「〇 一（〜三十七）」）。

卷四（卷名目録は丁付無し・本論「〇 一（〜四十七）」）。

卷五（卷名目録は丁付無し・本論「〇 一（〜三十五）」・誠山跋文は丁付無し）

構成 天保五年成島司直序・卷名目録・本論（奥に跋文）・誠山跋文

序文「若草の跡を尋ねて野辺の露をわけ、山下水の源をもとめて波路の霧にこかるゝとも、是かしるへをえすしては、いかて思ふ方にいたりきはむへき。されは何かしの大臣は河海の深き底意を探れり。彼大殿の花鳥の余れる情をくみ給ひ、あるは觴をあらふ岷江の流にさかのほり、一露のしたゝり万水の始たる理りをさとしなとするたくひ、あかりての世より今の時に至り、家々の説人々の考へ、細谷川の絶やらず、野へのかつらの延ひろこり、たと／＼しさをさへ添ぬる心地せらるゝをいかゝはせむ。さるは此物語陽に男女の情にもとつき、陰には又論の道を正し、善を勧め悪を懲しめし筆の勲は、止観玄義の深き旨より出しともいひ、麟経馬史のうるはしき趣を法とし、列莊の寓言にならひしなとも聞え、すへて女文字もてしるせるさまは、なたらかなる物から、其旨の深く遠くして、たはやすくよみときかたきに、故に秘事伝授も出来し成へし。近き世に再晶院法印の湖の月の光こそ、あまねく初学の助けとして、なへて世にもて遊び草とはなりぬれ。それさへ事広ければ要を得かたく説おほければ、迷ひをなしやすし。いま忍草といへるは詞の華をかさらず、事の跡をもあれくり求めす。たゝ巻々の大意を耳近き言葉もて、見む人の心にさとしやすからむをのみむねとしぬれば、物語よむ輩のまつ此文より分入らむに、山口の道しるへこのうへやあむへき。こたひ梓にのほせてひろく世にものせむとて、夫にはし書せよとこふ人あり。やつかれ今は青様のいとなみ繁き仕の身にて、檣櫂の才いよ／＼老くちぬれば、浜庇久しくかゝる事皆いなみぬれと、此文のひろく世に行はれなむに、初学の人々も桐壺の夕の露光隈なく、夢の浮橋夢路をたとるまよひあらしとめて思ふあまり、夏草の花もなきことの葉を、小鹿の角のつかみしき筆とりし年の名を天保といふ五とせの水無月、暑さをしのく北窓の下にて、成島司直しるす 篠木信定書」(※句読点は稿者)

跋文「此物語は人皇六十六代の帝一条院みかどの御后、後には上東門院と申奉る、其御内の女ばう達紫式部といひし官女の作也。ひかへのある事になぞらへて、なき事を作れり。八十二代の帝後鳥羽院の御時より、世にもてはやしけるとなん。式

部親は堤中納言（兼頼）の孫、越後守為時といふとなり。

小鏡（かぎ）、無外（むげだ）、十帖源氏など、猶言葉えんになまめきて、其道にうとき人のためにはくもりたる鏡の影明らかならぬ心ちすれば、夜の錦（にしき）とやいはん。其心の行やうにちりばかりづ、かき付よ、とせめて聞え給ふめるは、尾上氏の何某也。いはけなきそのかみより此物かたりにしうふかくて、からうじて求出たれど、いましめ給ふ心を師とせん外には、いかにととふべき人もなし。罪（つみ）なくて見る配所（はしよ）の月は、心ある人のをかしうする事なれど、木のはし石（いし）のかけ（かけ）にひとしき身には、ながむるかひなく、心にくもる春の長閑なる空に遊（あそ）ふいとゆふ（よ）をくりかへしては、夏衣うすきひとへに心をいたましめ、秋風にはころぶる藤ばかまならねど、きりくすのいさめにつりさすわざのいとなみに、いたづらにくらす時しもなければ、心やすく打見るほどさへ有がたけれど、さりとして心のくしぬるなくさめには、もてるはりの行ゑをわすれて、こ、ろざしたかくそめてしおりければ、きえあへぬ雪を花と見るほどのひが心えは、心えぬにしもあらねば、いかでさはともいなびはてん。一まき／＼の中のことたる所ばかりを、九つのうし（うし）の一すぢの毛、大海をこぎ行あまの小舟の楫（かぢ）の一（ひと）雲（しらく）なれど、十といひて五三ツ一ツの数なれば、書つけしほう（ほう）二百にあまれり。かくては暦（こよみ）のこ、ちこそすれ。今少し大きに書て見せよ、との給ふ。十年以来のあつしう成ぬ。其心ちむねさはぎてふるへば、み、ずが（ね）きいとせんかたなけれど、かの人の身のわざに病もなかは過てさはやぎ、道（みち）／＼しきかたの物語には、まがれる心（こゝろ）もなしくおほゆれば、いかでおろかに思ひきこえん。色みえぬ心をはかへてだにこそ見せ奉り給ひけれ。我も此人のためには、なき手を出してもはゞかりはぢぬべき事かは、と思ひおこして、わな、きつけたるすみのおと、いふかひなきもじつかひは、きくかひなきことばつゞきにはよくゆへづきてほ、ゑまる。たゞひとり、のき（の）のつまにおふるくさと見給へ、それをこそ此名にもかり侍れ、かへすぐ。

吹風もちらすな外にはづかしのもりのことのは書あつめおく

かたみともいはまし物をしのお草しのばれぬべきわが身なりせば」(※句読点稿者)

跋文 「是はしも物語のはかせたちたるふる人、むらさきの根さししるへき大むねをつみとりて、若草のうひ学ひのためにたよりせる文なれと、うつしつたへの中には忍ぶのみたれやと、うたかはしきくたり多かるを、巻／＼に考へあはせところ／＼に補ひくはへて、この一本のゆかりの色より見ん人の心染よとて、はひさす野辺のひろく世におこなはれなむことをほかするといふ。檜の山人にかはりて下野見せし紙のおく、余れるところに晶城かきつけて返しつ 笹田誠山筆」

(※句読点稿者)

刊記・識語 無。

旧蔵印 「友野蔵書」(子持ち粹朱正方印)「山岸文庫」(複郭朱長方印)「山岸」(短辺朱小型丸印)

源氏物語忍草(黒川九一)

冊数 刊本(整版) 五冊

装丁 袋綴(四孔・白糸)

表紙 寸法二五、二×一八、〇。青色布目地に白の波透かし文様入り紙表紙。

外題 表紙中央に朱色刷題簽貼付。題簽寸法一七、四×三、〇。題字「源氏物語忍草 一(一五)」(※山岸 equal 色違いの刷題簽)。第一冊目のみ封面題「源氏物語忍草」。

内題・版式・本文料紙・序・跋・刊記 山岸 equal 同じ。

構成 天保五年成島司直序・目録・本論(奥に自跋)・晶城跋文・売立目録。

版心 卷一(序文)〇 一(一五)・卷名目録は丁付なし・本論〇 一(一四十七)

卷二（卷名目録は丁付無し・本論「〇一（〜四十三）」

卷三（卷名目録は丁付無し・本論「〇一（〜三十七）」

卷四（卷名目録は丁付無し・本論「〇一（〜四十七）」

卷五（卷名目録は丁付無し・本論「〇一（〜三十五）」・誠山跋文丁付無し・売立目録「目録一（〜六）」

目録 第五冊目奥に「金花堂藏板目録 日本橋南通四丁目 須原屋 佐助」。

旧蔵印 「物語」（单辺朱丸印・黒川家分類印）「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」（ともに单郭朱長方印）

備考 山岸¹⁰と該書は、表紙と刷題簽を異にする他、該書の方にのみ、①封面題（第1冊目のみ）②前遊紙一丁（各冊）

③売立目録（第5冊目）がある。版面は山岸¹⁰本の方が鮮明。

◆14 源氏大繩（山岸八四四）

冊数 帙入り・大正十年写一冊。

装丁 大和綴（四孔・紙こより）

表紙 寸法二四、五×一六、八。共紙表紙（三極紙）

外題 表紙左肩に「源氏大繩」、同右下端に「麓園藏（花押）」と墨書。ともに底本の表紙を模したもののか。

内題 料簡題「源氏大繩之事」

構成 料簡・本論（梗概）・語釈・卷名目録・跋文・加詞。

書式 根幹となる本論部分は片面一一行、料簡と跋文は片面一〇行で、加詞は片面七行、一行字数はいづれも二〇字内外。本論部分は要点毎の一つ書き形式で、卷名による見出し等はない。和歌はそのまま地の文に連結するが、肩に朱色の

鈎点が加わる。

跋文「右此一巻は源氏物かたりの秘したるつたへをたつねよせたるものとて、題号を大繩となん申けるとこそ、やむことなき玉たれのもとより、よくや侍る見給へ、と申をくりたまひぬ。本書女の筆なれば、文字もたしかならず、うたかひおほく侍れと、予か末の娘筆とる事をこのみ、さもなきひなひたるさうしなともてあそひければ、かれにこゝろさしつゝ、人に見すへきものにもあらず。かつは身の、ちの形見ともおもひて、六十あまり八とせの初冬思ひたち、水茎の跡かきかす。すへまてたとるこゝ、ちしてかひやりぬ。木葉色付や、落葉に置初る霜かさねし比なれば、ちひれし老の筆いと、すくみ、すが目のまなしりすりてもものしければ、かつななき形見に恥かくならくのみ 元禄七戌年初冬 綱岩（花押）」

加詞

五倫の一にして朋友の長たりし羽石氏のなにかしは、予かため隔なき結縁ふかく侍れば、真実他にこえたる契りにこそ、往古領主の家臣たり。一騎配当の身にして手かけの采拜をもてる司にし侍ればなり。その心ひなひす、あてはかなる事をこのみたまへり。さはいへと不幸さきにして、五十の比にや、かの公けの御本をさり給ぬ。旧友袖をひきて外よりまねくといへとも、二君にまみゆへき事を本ゐなしとうとみ、今や上野佐位の郡いせ崎にして、広瀬川のなかれに身船を漂したまひぬ。ひなの住居柴の扉の明くれ、貧窮孤独のいとなみ金殿の楽をなせり。或時は禪門の方丈に入て経外別伝を論し、又或時は浄土の院室に詣て信心決定の本ゐを琢磨し、又或ときは一瓢の立花の露に心穢をそしき。四季転変のもてあそひに歌をすし、俳言に名句新作をつくりて鬱氣はらし、快晴静なる春を求ては蹴鞠の坪にのそみ、其興を催し給ふ。いつれも目とまる程にもしたまへは、古昔武備の一統すら思ひやらるゝ。此人齢ひかたふき、わすれかたみのみとり子にめのはらはひとりをもてり。おひたちなむ後のあはれを思ひ給ひて、源氏物かたりの密しをかきたるものとて、一百六十丁にこえたるものを、神無月のころ思ひたち給ふ。所から赤城下風の冷氣も、ことし聞

月の故にや例にことなり、まかきの菊も霜のために色をうしな(な)ひ、一器にたゝへし水もひさけをとちしさまにし侍れは、青陽の春をむかへて出来ぬへくさとしけるに、程なくかきみて給ひぬにや、慈愛まことに眼せひあきらけく、うの毛もこることなくかきあらはせたまひし。筆なたらかなりしをこそりてたむしける。予又むま子のおさあひ侍れと、とも六十の春秋過し身なれば、叶ふへきものにあらず。ひとへに恩愛のむつまじかりし契りをかんし、一紙の末をけかし、こゝろのはするにまかせかくなむ

うら山しなかくもとむる水くきのあとまで残すきみなさけは

不応軒夢樂印(※句読点稿者)

書写奥書「この書の(源氏大綱) 原本は伊豆修善寺温泉場住三須如雲氏の蔵にして、書中元禄七年とあるに、紙質と云ひ筆くきのあとなど、古きをしのぶに足るめつらしきものとおもひしかば、おのれ病余撰生の為とし七月二十一日以来この地に滞在せしかば閑暇写して余考の資とはなしぬ 大正十年霜月上旬 麓園(花押)」

識語「源氏大綱一冊 小鏡ノ類也 昭和十年五月中浣 文行堂にて求む 岸廼舎」他

旧蔵印「山岸文庫」(複郭朱長方印)

◇源氏物語紐鏡(山岸一一四〇)

冊数 一帙刊本(整版) 一冊

装丁 袋綴(四孔・白糸)

表紙 寸法二五、二×一八、三。縹色布目地空押紙表紙(原装)。

外題 表紙左肩に子持粹刷題簽貼付。題簽寸法一九、二×四、〇。題字「源氏物語」ひもかかみ 全

内題 封面題「ひもかかみ/松蔭蔵版」、巻首題「源氏物語ひも鏡」

本文料紙 楮紙

構成 安政六年藤原長好序・本論・天保十四年堀内昌郷跋・安政五年源匡平自跋・安政六年跋文

版式 四周単郭。内郭一九、七×一五、〇。序と跋文は片面七行×一行一五字内外。本論は片面一〇行×一行二六字内外。

版心 丁付あり。序「序一（一六）」（藤原長好序）・本論「一（一三七）」（文末に昌郷跋文・匡平自跋）・跋文「〇一（一五）」（安政六年跋文）

序文 「仮字のよろつのさうしのなかにも、紫君のひかる源氏物語よりよきはなかるへし。さるは平安の京の春の花、秋の月はさらなり。五節の舞姫・南殿の花の宴・あやめのせち・重陽のえむ・すさく院大原野の行幸・馬場のくらへうま・弓・まり・琴・笛・絵合・たきものあはせ・賀茂の齋院・伊勢齋宮・あつまの筑波山・つくしの太宰府・西山大井河・北山・ひえのやま・石山・宇治・はせ・浪花・住よし・須磨・明石のけしきなとをとりませつ、いともやむことなき御かた／＼のいもせの御なからひ、すへてをとこ女のましらひのこをつくりて、四の時の八十たひへけむあひたに、ありしやうに語りいて、うるはしうたふときも、あさましうけしからぬも、いと／＼おほく、あたことまめことさま／＼なり。かくえもいはすをかしければ、かたゑみつ、よみもてゆくに、めにみえぬこ、ろのうれはしきかたのなくさみやはらき、おのつからみたる、かたのをさまるは、いか、おもひのほかにめてたからさらむ。まいてそのみやひことはのつかひさまを、いとようならひえは、もろこしのいかめしき真名文、とほき西の国のさかしきかな書に、をさ／＼はつかしからぬふみも作りいてつへきをや。しかはあれと、たまもみか、されはひかりなきかことくに、物語もよくきかされば、こまやかにさとられす。さるからにそのことこのこ、ろをいひし書の、ふるきもあたらしきもこ、らあれと、猶おろかにもれたることのすくなからす。なか／＼にこよなうもてひかめしはたなきにあらず。かゝるに今はむかし、それかしまたわ

か、りしとき、ものならふかたの、おやともせうと、もたのめりし松蔭翁、わざとの学問のいとまのひまに、そのひかめるをなほし、もれたるをときあかさされしものあり。名つけて葵の二葉といふ。この葵のおい出しによりてなむ、ひかる君のものかたりのにほひの、八百年はかりかくろへたりしも、いましのこれるくまなく、てりか、やくものとなれりける。かくてこそわか紫のもの、かたらひのむなしからずして、よにうるはしきこゝろはせも、またいとけちえむにあらはれみえけれ。あなめ^(マ)たの葵のさまや。こはかならずひかるきみにそへてみるべきものならん。さてはかなき花鳥のいろにもねにもなさけなからずして、歌よみふみかく、天下の四方のまめ人にしかめつらしきそのあふひくさをいとやうおくりて、いかにとはまほしかるを、つみいれたるかたみからは、かたかれはすこしつゝ、たと、今の松蔭ぬしにそ、のかしはかるに、まつこれとあるにも、葵のおもかけのいさゝかみゆれば、その名を紐鏡とかりにつけて、すなはちなにはのふみやにつかはしつ。あはれいかてよき友を得なは、このかゝみにうつろふ影よりほかの、あまたある葵をとう出つゝ、もろともにかのかきりなうひかる物語にあはせみて、そのめてたきをかたらひさためましとぞ。

安政の六とせといふとしのむつきのふつかの日、松蔭の抱海といふ、たかきやにのほりて、かくはしつかたに、をさなき口つきとはすかたりするものは、おなし伊予の国の沖なかなる大三嶋に釣する海人の、とまやめく家のみつから後楽園といひてすまひする 藤原長好

かの郷に額字こはしたまひしとき、大みしまの大神の宮人の、又おのれにこのもし書てよとこはる、もよしありけに、なとひとりわらひして筆とるは、たひらのあつまを」(※句読点稿者)

他跋「今まであらゆる注さくどもには、このすぢの見えず。また偶いはれたることあるも、委しからぬゆゑに其深きこゝろのしられずして、何となく見すぐす人もすくなからず。さては物語もいたづらごとゝなりて、いとあらたしきわざになむ。かゝるめでたき書なるけにや、そのかみはやう世にも出て、大内にも寛弘の帝の近うさふらふ人によませ給ひ

つ、聞こしめして、いみじう感ぜさせ給ひ

この帝は冬の夜に御衣をぬがせ給ひて、四海の民を思ひやるに我ひとりあた、かなるべからず、と仰られけるよしものに見えて、いともありがたくしき帝にぞおはしましたける

殿上の人々のなかにもほめはやして、作主を若紫との給ひけむなどは、いみじきめいばくにて、かしこまりよるこぶべきことなるにつけて思ふに、其まだわらはなりし時に、その父越前のかうのとの、をのこ子にてもたらぬを歎かれしはさることにて、子をするはおやにしかずといへる、もろこし人の言の葉さへぞ思ひ合せらる。己も年ごろ深く考へて、今こゝにいへるやうなるふし／＼を、心のおよぶ限りはたづね出て委しうかきつゞりしもの、三十巻ばかりもあるを思ひひがめたることもやあらむと、松の屋の藤井翁に見せ参らせて、そのさだめをこひしに、師のいはく、いとめづらかにもかうがへ出しものかな。まろわかかりし時より、かの物語を好みていくたびも／＼よみて、みやこなにはの人のとへりしに、もとき聞せしことたび／＼なり。また尾張の人清水宣□(虫孔)は物語の註さくをものせむとて、千度づ、四かへりよみしといへり。されども猶このむかひしのこととはともに思ひよらざりき。こはたとへば、大きな山にいらりて茸がりにせむに、いくたりいきても猶のこれる茸のあるが如し。げにものをふたつむかへならぶれば、其よさあしさのいとよう見えわかるゝは、今の世の芝居といふものもさやうなり。かゝればこはそのふたつむかはる所を名として、葵の二葉とすべし。其よしをまる、はしがきにものせむ、とていたくめでられきと、菅原長好よりつたへていひおこせつるを、翁の程もなく身まかれしかば、其まゝにて今にもたり。後にまた思へば猶あかず思ふふし／＼もあれど、やう／＼老もて行身にやまひさへくはゝりて、何わざもわづらはしければ、かの物語深くこのまむ人あらばあつらへつけばやとぞ思ふ

天保十四年九月

堀内昌郷伊予國「(※句読点稿者)

自跋 「こは今よりはたとせばかりあなたに、父のものせし葵の二葉といふ書ありて、其後またことにかきおきしものな

るを、いとあまりにことずくなにて、ことのさまによりては、その意のふとさとりくるしき所もあれど、そは本書あればさてありぬへしとて打やりたるに、其本書のかたは巻数もいと多くて、一わたりよみわたさむにさへいとまれば、其説のあるやうを大よそに見むには、かくかいつまみに短くかきとりたるかたぞよろしかるべきに、と思ひて、をり／＼其本書を見まほしといふ人のあるに、まづこれをものせむとするにあはせて、このごろまたある人のもとより、いかでかの葵をすこしづゝだにつみ出てひろく人にも見せばや、といひおこせければ、やがてこれを見せたるに、かうやうのものゝありしこそいとうれしけれ。しかはあれどかくてはあまりにあらくて、見む人のたゞ／＼しからむと見ゆるふしもあれば、今すこし委しきかたにとりなほして、といふに、なき後のさかしらはいとあるまじきわざなりとは思ふものから、か人のいへることもいなひがたさに、しひて思（一）ひおこして、さいつごろよりかの本書を校正せるついでに、そをひき合せて、所によりては其文をさながらつみいで、或はあまりにこと長きはよき程にとりちゞめなどして、ことの意の聞えやすからむやうにと、こゝ、かしこにかきいれたるになむ、かくいふは安政の五とせといふ年の神無月ばかり、昌郷がまな子、後の松蔭のあるじ源匡平」(※句読点稿者)

跋文 「古へいとめてたき野なかの清水の、いつのほとにかやうやくぬるみそめしより、み草ともおのかさま／＼生ひしけり、時めき咲みたれ、蛙ほたるも処得かほに声をきそひ、光をあらそふなど、水の心にもとの心を知る人や、など独こち、いかにくちをしましをと、紫のおもとの見るにもあかす、聞にもあまりて、さるかたにきら／＼しく光りか、やくはかりの殿造りしわたし、前栽の内に富の小川の清き流れをせきいれ、水の心はへより石のたゝすまひまで、すへてをよくまねひとりうつされて、やかて長き世のためしにとてなむ、あやめ竹を植られ、それにあひならへて、いろも姿も似かよへるかきつはたはさらにもいはず、花かつみ・まこも・草かま・蘭・玉藻など、つやありてみつ／＼しきみ草のかすをつくされたりける。そも／＼其処のさまよ、世の中のものゝかきり処々の風景をさへとりいれられ、よろつまはゆく

事たらひてのこるくまなし。四季折／＼につけて、鳥虫の花になれ、月にあくかれ、木竹の霜に染み、雨にうらみ、空ふく風松か枝にしらへ、下ゆく水柳のかげに縷おりなど、いひしらすをかしく今めかしきなかに、おの／＼たてたるおもむきことに、こゝろはへおなしからて、生ひたちさまのよさあしざ有りて、物のあはれもの、心を知りしらぬに、心と、めて身のほと／＼につけつ、汲しり引見るへく、かまへ作りなし給へるものになむ。さるをすきかましききは、えむにうるはしきことの葉の、花やかにあためき匂ひこほる、かたにのみめうつり、かたくなゝるきは、すきことのなかたち草そ、などしれ／＼しくいひおとし、さならぬも底の心をえしらぬはさるものにて、一わたりうち見たるさまこそはあれ、そのときめきあためくにも皆つくりなしけむ。もとのゆかりのあなるものと、吾か学ひの兄なる松かけの翁の、磐井の水の深き心にとしころ汲み引しりて、あやめのかつらあやめつらしく、かきつはたのはら／＼にときさとされし、葵のふた葉てふ書なむある。そを後のあるしの花かつみ、かつ／＼摘いて、かりこものかりそめに紐鏡にとりうつし、若草の摺巻となして、浅茅かはらの露わけゆかむしるへ竹とはせられしなりけり。実に彼のおもとの後の世にいひつたへさせまほしとて、作り植おかれしものと、こゝろも深き根さしも、いつれをそれとひきわつらふことなく、今はいとかくさたかになむいて、あなうるはしの水のあやめや、あなめてたのあふひの二葉や。さておのれにひとことをそへよ、とあるに、つひ十はたみそ四十と算ふはかりの長ことを、たと／＼しくもかいつくるは、すなはち伊予のゆのかたほとりにつま木こりたからすたにの黄教 安政むとせといふとのむ月」(※句読点稿者)

刊記 無。

識語 「昭和三十三年三月朔 京都細川より 岸廼舎」

旧蔵印 「山岸文庫」(複製朱長方印)

⑩ 源氏鬢鏡（文芸）

冊数 刊本（整版）二冊（中巻欠）

装丁 袋綴（四孔・白糸）

表紙 寸法二七、二×一九、〇。上冊は香色無地紙表紙。表紙中央の題簽剥離の痕（題簽寸法は一九、五×四、〇か）に外題を墨書。下冊は表紙のおもて紙が剥がれ、左肩に外題を墨書（上冊外題とは別筆）。

外題 「源氏物語」（上冊）「源氏鬢鏡」（下冊）

内題 「源氏物語」（上冊・料簡の題）「源氏」（耳格）「鬢鏡後序」（下冊跋文題）「源氏鬢鏡」（跋文の本文中）

構成 自序（一丁）・料簡（一丁）・本文（上冊「一きりつほ」～「十三松風」、下冊「二十三夕きり」～「夢のうきはし」）・後序（跋文）・刊記。

版式 自序・料簡は四周単辺（内郭二一、七×一六、五。片面一五行×行二〇字内外）。本論部分は上下二段組で、上段に本文、下段に挿絵を配す。上段（子持ち枠。内郭六、一×一五、八。半丁毎に、巻序・巻名・並び・梗概・巻名を詠み込んだ発句をしるす。不定行×不定字）。下段（四周単辺。内郭一五、〇×一六、〇）。後序（四周単辺。内郭二一、九×一六、四。片面一一行×行一六字）。全丁欄外の耳格に丁付記載。

丁付 上冊（源氏巻（一十二））・下冊（源氏二十二（三十一））。

挿絵 上冊一八図。下冊一七図。

序文 龍田山のしら浪音しつかにして、夜半の関の戸さすこともしらま弓、やことなきもいやしきも、和歌の浦に心をよせくるなみのたちゐにつけても、住吉のはまのまさこのつくる事なく、言の葉のはひこほり、くちなしのいはての里をもいひなくさむは、徳のいたれる御代なればなるへし。抑源氏物語は和歌の第一にして、この国のたからなり。しかのみな

らす、仏法には無量光仏ともいひ、あるは無対光仏ともいひ、神道には宗源の二字に通ずるもの歟。あに是を見る人の歌は、袖ななき者はよくまひ、多銭なるかよくあきなふにひとしからざらんや。しかりといへど、その心ひろさはのちよりもふかく、言葉幽美にして、大井河のすみにこりをもしらぬ、われ／＼かこときの愚なるは、見れとも見えず、聞とも聞えず、いとらうかはしきを、いつれの人にか有けん、源氏小鏡といふをかきて、くもりなき世にあらはし侍るは、まことに道にいる、のはかりことなるへし。しかるを、今さらいひいつへきにあらいそのはまくり、かひの玉くしけ、ふたりの俳友そこはかとなく寄居て、謝安かうたのはなごゑのみをまなふに似たれど、彼小鏡をつゝめふところに入、たしなみにもならんかして、源氏びんか、みと名つけ侍る事、益なきの能をなし、補なきの説をおさむる事、なをし夏をもて炬をすゝめ、冬にいたりて扇をすゝむるのいたつら事なれど、子共たらしのたくひにこそあめれ。且又俳諧の発句をくはふる事は、あしかきのまちかき世にいたりてもはらなれば、時に応じて仏の御法をとかせ給ふ心にもとつき侍る。猶作者の次第は、ふるき集を見し。まきのよしあしをもきはらず、句の有次第にしるしをはんぬ。猶また源氏の心のかなはぬもあれど、一句のうち題号のこもりしを、さちにし侍る事、ゆめ／＼なしり給ふへからず。たゝおそれらくは、作者の夢に我許に来てなかつ事をおもふなるへし。」(※句読点稿者)

発句詠者 松永氏貞徳居士(きりつほ)・荒木田氏守武(は、き木)・雞冠井氏令徳(うつせみ)・荒木田氏從五位上武珍(ゆふかほ)・越前本勝寺上人日能(わかむらさき)・大坂林氏息女長(すゑつむ花)・馬淵氏宗畔(もみちの賀)・雞冠井氏令富(花のえん)・堺牡丹花末慶友(あふひ)・松江氏重頼(さか木)・石河氏鄙哉(花ちる里)・江戸住徳元(すま)・渋谷氏紀伊守以重(あかし)・江戸住未得(みをつくし)・村上氏令敬(よもぎふ)・末吉氏道節(せきや)・住田氏政信(ゑあわせ)・藤田氏友宣(松風)・雞冠井氏令清(夕きり)・江戸住玄札(みのり)・西村氏重俊(まほろし)・尾州名古屋住一原氏友我(雲かくれ)・楓井氏令富母妙仙(にはふ宮)・高瀬氏梅盛(こうはい)・大坂了安寺夕翁(たけ川)・松坂氏

和年（はしひめ）・青木氏宗員（しるがもと）・鳥川氏京永（あけまき）・端氏定重（さわらひ）・中嶋氏貞宣（やとり木）・村上氏令知（あつま屋）・尾州清水氏不存（うきふね）・鈴村氏信房（かけろふ）・小嶋氏宗賢（手ならひ）・山崎宗鑑法師（夢のうきはし）

後序「源氏鬢鏡者、依源氏物語卷号著図撰近世俳諧発句為篇。雖曰玩物喪志而、未可始無意義也。蓋源氏物語雖陽託醒酬冷泉之聖朝、而陰補史家失職之闕文、走筆於行事之蹟、探趣於人情之頤、詞意艷美以宛轉意義曲節而隱微。是以不善讀者誤人多矣。三綱於礼男女之交情、其於善者則思周召之正風、其不善者則刺鄭衛之變音。所以紫氏為之私泣明皇貴妃之綿恨。其意可見也。侈者示命途多差、憂者喻遇合有時。貴紳鑑此以正朝儀、君子鑑此而明得失。至若花晨憐霞、以愛春日之難永、月夕悲露而傷秋山之易落。詞林攀材歌仙煉丹。豈無能鑑此耶、可謂紫氏寶鑑也。昔唐太宗曰、人有三鑑。以銅為鑑可正衣冠、以古為鑑可知興廢、以人為鑑可明得失。世說源氏物語者無鑑於此、寧無恥紫氏之筆耶。夫以當今之世干伐不動治致泰平日既久矣。民壤其風各鳴其安。則翫俳諧盛於古昔。雖云未及風雅之德、而氣象温和風俗不頑於是乎。有可共言者也。是以小嶋氏宗賢、鈴村氏信房共撰此篇、其要自依此篇、以入紫室便照寶鑑、以內省也。見此篇者無以鑑、此則二氏之用心亦可恥也。所以其号源氏鬢鏡之微意在茲哉。古人有源氏小鏡、又何意也、二氏乃鶉冠氏令徳門人。令徳氏は松永氏貞徳高弟也。二氏之於俳諧其伝有所由来云」（※句読点稿者。原文の送り仮名は省略した。）

刊記「元禄七戌教陽之吉 偶応其需妄識其後／洛下素柏撰／江戸大伝馬三町目／鱗形屋板」

識語「源氏鬢鏡 共二冊中卷欠」（上冊前見返し）

旧蔵印「斑山文庫」（単郭朱正方印）「☆」（星形墨印）

◇源氏鬢鏡(文芸)

冊数 刊本(整版)一冊(隠し丁付によれば下巻のみ)

装丁 袋綴(五孔・後綴糸茶色)

表紙 寸法二六、四×一七、三。香色菱繋ぎ地に唐草空押紙表紙。中央に題簽剥離の痕あり(剥離題簽の寸法は一六、五×三、五か)

外題 表紙左肩に白地書題簽貼付。題簽寸法二三、五×三、六。題字「貞徳・守武・立圃/万治年中俳諧之本」。

内題 「鬢鏡後序」(跋文題)「源氏鬢鏡」(跋文の本文中)

版式 源氏物語各巻を見開きで掲示。右丁に本文、左丁に挿絵を置く。本文は無辺。不定行×不定字。絵は四周単郭。内郭一九、三×一四、五。のどに隠し丁付「下ノ一(〜三十二)」。後序(文末に刊記)には丁付無し。なお該書では「下ノ十五」が脱落し、結果「二十四御法」の絵と「二十五幻」の本文を欠く。また「二十二横笛」(丁付「下ノ二十二」)の次の「鈴虫 横笛の並」の丁付を「下ノ八」とする。この丁付は明らかに誤りだが綴じは正確。「手習」(丁付「□二十八」)と「夢浮橋」(丁付「□□九」)綴じが逆に入る等の錯簡がある。

構成 本論部分(「篝火 玉鬢の並」)「夢浮橋」・俳諧字統系図(「下三十(〜三十二)」)・鬢鏡後序・刊記。

挿絵 二八図。

後序 有。

刊記 「万治庚子臘月之日 偶応其需妄識/其後 洛下素柏撰/度々市兵衛開板」

旧蔵印 無。

識語 「暁山集」(後見返し)

備考 前掲本（通し番号16）が江戸版だったのに対して、該書は万治三年（一六六〇）に刊行された上方本である。絵と本文とを一丁にまとめた江戸版とは違って、上方本では絵を本文とを一丁ずつ独立させている。但し絵の基本的構図はほぼ同じ。

⑱ 若草源氏（文芸）

冊数 刊本（整版）三冊（箒木・空蟬・夕顔の三冊）※自序によれば桐壺・箒木の俗語訳『風流源氏物語』に刺激され、箒木の末から夕顔まで全六冊を記したとある。

装丁 袋綴（四孔・糸茶色）

表紙 寸法二七、三×一七、八。紺無地紙表紙。

外題 表紙左肩に子持ち枠入り白地刷題簽を貼付。題簽寸法二〇、三×四、〇。題字「〔新／板〕わか草源氏物語（は、木、／□□）」（第一冊目）「〔新／板〕若草源氏物語（うつせみ／二）」（第二冊目）「〔新／板〕若草源氏物かたり（夕かほ／三）」（第三冊目）

内題 「わか草源氏物語」（宝永四年序文本文中）

構成 第一冊目（宝永四年容膝軒序・宝永三年梅翁（奥村政信）自序・項目「梅翁書／襖障子は恋路の関（かけがねはづれて貞女もうき名／女の閨には心を付べき事）」・本文）。

第二冊目（項目「うつせみの衣は恋慕の種（焼しめた香ほりは女のたしなみ／ねまきにも気を付べき事）」・本文）。

第三冊目（項目「しろき扇は色の下染（かふるがまねきし／夕がほの宿り）」・本文・項目「板間を洩も名月の影（糸竹の音に／かへてきくからうすのおと）」・本文）。※第三冊目は夕顔巻三と巻四の合冊か。

版式 四周単辺（内郭一九、四×一三、三）。「容膝軒序」は片面九行×行二〇字内外。「項目」は散らし書き。他は片面一三行×行二五字内外。和歌の掲出方法は改行四字下げ二行分かち書きのもの、改行しないもの、また傍注を付したものと種々。

版心 巻序と丁付を記載。「巻一 一（〜十八終）」（第一冊目）。「巻二 一（〜十三終）」（第二冊目）。「巻三 一（〜十四）」（第三冊目。なお第十五丁目の丁付無し）。「巻四 一（〜十四終）」（第四冊目。最終丁の第十四丁目を後見返しにする。）

挿絵（第一冊目）四図。（第二冊目）五図。（第三冊目）巻三は六図、巻四は四図。

序文 「わか草。源氏物語はいかなるにや。其よる所をしらす。かの。石山に籠居て。湖水の月に。須磨明石の佛を心に浮て。六十帖をかゝれたる昔のよねの筆の跡を。今の世の。紫帽子の。色を含まる言葉に写して。根に通ひける野辺の若草といふ心にや。尤翫へきものなり。干時。宝永四年〔初／春〕書林の求に応じて筆を取侍りぬ〔洛陽隱士〕容膝軒」序文「霖雨はれまなき比。炉にせんじちやをしかけ。釜のたぎるを聞ねいりにする折ふし。ちいさき娘の侍るが。同じころなるともどち。其つきくの女子まじりに。次の間に集りて。心ちよきゆめ見るじやまなして。草紙などよみ侍りし中に。風流源氏物かたりといふものあり。いかなることをかきたるものぞと。よませてき、侍りしに。源氏物語を。当世の俗語に写して桐壺は、木々の二まきをかけり。尤。きりつぼの巻は。あらし本文によるといへども。は、木々にいたりては。肝要の所々を略し。あるひはあまりに興あらんとにや。おもひかけぬさまにとりなしたることども。あまた見え侍る。抑げむし物がたりは。実に吾朝の至宝好色艷言をもつて仁義五常の道をおしへ。兼て老荘のむねをとき。因果の理を示し。中道実相をさとらしめて。つねには仏道に引入たるものなり。善をすゝめ。悪をこらし。貴賤の人情に通し。別て女子に道をおしゆるの術。四書五経といへ共。この書におよばす誠に。源ふかき水は。くめどもつくることなく。金玉は

みがくに弥ひかりをます。此書を見るたびに感ることおほし。○予 おなごどもに問。ふうりう源氏ものかたりは。義理よくきこゆるや。答て云なるほどよくきこえます。○佛 こゝによつておもふに。此書もと好色艶言をもつて。人／＼このむところより道に引入たる。むらさき式部のほんゐにまかせ。いまの世のはやりことばにうつし。下がしもの品くだれる。賤山がつのむすめにいたるまで。いろはのもじをおほゆれは。これをよむにかたからず。猶又。所々にあらぬたはぶれ事をくはへたるは。よむ者の倦んことをおそれて。わらひをもよほしねふりをさまさんがためなり。しかりといへども。全く私に書加へたるにもあらず。おろかながら本文の心をさつして書侍る。よし。しる人はしるぞかし。抑又少もこゝろざしあらん人は。本書にひき合てこの草紙を見給は、諸抄を集に不及。本文の義理よく聞ゆべし。誠に式部は石山の観世音の化身とかや。おろかなる筆のすさひにて。彼物がたりの妙理を書あらはさんとはあらず只此草紙をみん人。なにとなきたはふれごとにひかれて。志を起し源氏物かたりを見給はんたよりともなれかしとて人のあざけり。身のつみをかへりみず。箒木の末ざまより。夕顔の巻にいたり。全六冊にかきて先彼女子どもに見せ侍りしに。つね／＼は、木々の巻は。源氏一部の序。ことに雨夜の品定をよくのみこめば。末々まですむことじやと。おしやりました程に。述のことに品定から書て。下されませいといふもおかしく。まづこれを見て鳴を止よとて少娘子にとらせ侍る。干時宝永三初秋「芋の葉の露を硯に／＼ためて梶のはに歌書」序に「(※振り仮名省略)刊記 無。

旧蔵印 「梅谷」(单郭朱正方印) (单郭朱小型丸印) の二種。「梅谷蔵書(单郭朱正方印)」「梅谷市太郎」(朱文。匡郭なしの長方印)「岡田真之蔵書」(複郭朱長方印)

識語 「寅第九ノ式」(第二冊目一丁才)「寅第九ノ三」(第二冊目一丁才)「寅第九ノ四」(同一六丁才。卷四冒頭)

① 紅白源氏物語（山岸一一四一）

冊数 一帙刊本（整版）三冊〔箒木〕の巻四が一冊、「花宴」の巻四が一冊、巻五が一冊の端本。もとは六巻六冊か）
装丁 袋綴（四孔・茶色糸）

表紙 寸法縦約二五、八×横約一七、四糎。香色無地紙表紙。

外題 第一冊目、表紙左肩に白地後補書題簽貼付（寸法一八、九×四、〇糎）・題字「新／板」（与俱希源氏物語）は、木、四」（墨書）。第二冊目は刷題簽破損、かろうじて「氏物かたり はなのゑん 四」と読める。

第三冊目、表紙左肩に白地に子持ち枠の刷題簽貼付（寸法一九、四×四、〇糎）・題字「新／□」紅白けんし物語 はなのゑん 五」

内題 第三冊目刊記「源氏物語欲解抄」

本文 楮紙。

構成 梅翁（奥村政信）自序・当該冊の項目・本論（俗語訳・絵入）・刊記。

版式 四周単郭（内郭一九、四×二三、一）。片面二三行×行二五字内外。

版心 卷名・卷序・丁付など。

第一冊目「箒木卷四 〇序」「箒木々巻四 〇一（〜十八）」（二丁オは項目書き）。

第二冊目「花宴巻四 〇一（〜十）」（二丁オは項目書き）。

第三冊目「花宴巻五 〇一」（二丁オは項目書き）「花宴巻五 〇一」（系図）「花宴巻五 〇二（〜十二）」（第

三冊目は本文の途中に、二条太政大臣家系図が混入）。

構成 第一冊目は箒木巻の序・項目書き・本論（俗語訳。箒木冒頭から途中まで）。

第二冊目は花宴巻の項目書き・本論（俗語訳。花宴冒頭から扇を取り交わすまで）。

第三冊目は花宴巻の項目書き・本論（俗語訳。承前から巻末まで）・刊記。

序文 「箒木 この巻の名歌をもて名とす。源氏の君十六歳中将と申し時の事なり

〔系撰〕

此巻は、木、と号することは源氏の君中河のやどりへ方違にことよせておはしましたるに、うつせみつれなくてあひまいらせずなりしかは

は、木、の心もしらてそのはらのみちにあやなくまとひぬるかな

とよみ給ひしに、空蟬ふせやに生るなのうさにあるにもあらで、なとかへしに奉りし歌にてつけたる名なり。これ坂の上のこれのりが ○その原やふせやにおふるは、木、のありとは見えてあはぬ君かな といへる歌をとれり。箒木とは美濃信濃両国のさかひに其原ふせやといふ所にある木なり：（中略）：世間のありさまをおもふに、は、木、にはじまりて夢の浮橋におさまると見るべきなりと云。有無の理かんようなり。人間万事皆箒木の有無の理なるべし。」（※丁付に「序」とあり。振り仮名略、句読点稿者。）

項目書き 第一冊目 「出ず入ずは物の真仲／粹を分かねしは女の品定／中にも極めぬがまことの中」

第二冊目 「須磨明石の月見も／あひに事有戸口へ覗が分別の場／おこりはちよつとした細殿」

第三冊目 「藤の花にまとひ付ても尋度ひとの行衛／よひかげんにあいさつするはした心しらぬぐはち／なげかしき身ぶりはふかきおもひ入あるよね」

挿絵 第一冊目絵四図。第二冊目三図。第三冊目三図（各冊とも第一図目のみ見開き、他は一丁一図）。

刊記 「千時宝永六つの年〔初／春〕日 梅翁書（博士）／〔江戸川瀬石町／書林〕山口屋権兵衛〔新／板〕／此次順々板行仕

源氏物語／欲解抄と名付全部仕候追付／桐壺は、木、の両巻全六冊開板」※本文は一二丁表で終わり、同裏に刊記が入

る。

識語 「欠本也 此本六冊」 （何冊か不知） 続刊八見エズ／紅白源氏物語（俗欲解源氏物語） 共三二「紅白けんじ物語」

「桐壺籌木 六冊ノ中四ノ花の宴 五冊ノ中四五」三冊ナリ 欠本」等（山岸氏）

旧蔵印 「竹裏館文庫」（無郭朱長方印）「山岸文庫」（複郭朱長方印）

備考 該書才一冊目は、東北大学狩野文庫「俗解源氏物語」（六卷一冊。宝永七年奥村政信自序。一〜三卷桐壺、四〜六卷籌木）中の、卷四部分と同一。但し卷四最終丁（一九丁目）を欠く。

㊦ 絵本源氏物語（山岸一一二八）

冊数 一帙刊本（整版）三卷合一冊。

装丁 袋綴（四孔・後綴緑色糸）。

表紙 寸法二二、三×一五、八。香色地に緑で麻葉繋ぎ地に菊丸模様紙表紙。

外題 表紙左肩に子持ち梓茶色地刷題簽貼付。題簽寸法一六、五×三、一。題字「雅情／儘粧」絵本源氏物語 上

（中・下）。

内題 「雅情時勢絵本／儘粧源氏物語／全部三冊」（扉題）

構成 寺井雪蕉叙・扉・酔雅亭隴月序・凡例・本論部分（絵・詞書・歌占）・定栄堂兒女弄翫書目次・刊記

版式 「叙」「序」は無辺・片面六行×行一三字。「凡例」は無辺・片面九行×行一九字。本論部分では源氏物語の中から

一八場面を選び、一場面につき見開きで一図を描く。また絵毎に詞書（当該場面の説明文や巻の梗概等）と歌占（新作和歌）一首を不定行でしるす。説明文中にはすべて「…占取出て見給ふに、梅松を得たり…」（ ）部分は占いによつて

種々)等として、登場人物達の選択は占いによって決定されたという脚色を設け、そこで得た歌占も大きく揭示している。のどに隠し丁付あり。

丁付 「上ノ一(〜十)」「中ノ一(〜七)」「下ノ一(〜七)」。

序文 「のどかなる夕つかた、月のさまうつし、千載のつゆこぼる、花草に虫の音のさへいとしづかなれば、わらわべ召出て茶をてんじ、香をたかせし折、朧月山人此書を携来りし也。何ご、ろなくひらき侍れば、濃紫に御ん色そへて、今一しほ幽玄のかたはすぐれて言の葉のたからで、情のあたなるは好ご、ろにそ、ろ浮れて文房にむかひしと思へは、甲斐三つの巻とはなりぬ。爾々の事を漫書して後叙とす。高井雪蕉斎」(※句読点稿者。振り仮名略。)

叙 「天地のわかれし始、神代より御裳濯川の清初て、ともににごらぬ石川や蟬の小河の清くして、和歌の浦波絶せずも此歌占は神ざとし。見ぬ唐国より伝にし書も数／＼筑波山葉山しばやま多かれど、遠山霞はるかにも此勘文やまさるべき。呉竹の世々経てもやんごとなき方に秘給ひしを、木下がくれさぐり得て侍れば、其言の葉の明らけく、耳近からん便にと、光君の物語爰にたどへて、藻しほ草書つらねたる水くきに、高井氏なる人の筆染て其折、の事づさを目もあやに絵書しを、春立空ののとけさ、袂ふりよふ諸人に與侍らは、ひが／＼しきも賢に入らん便りにならましと、色にぞしるき桜枝に、咲せしよしを四方つ国八島の浦の外までも普く伝畢ぬ。醉雅亭朧月書」(※句読点稿者。振り仮名省略。)

挿絵 各冊六図総計一八図。

刊記 「文校 醉雅朧月／画工 寺井尚選／彫刻 村上利右衛門／古今雨物語〔諸国珍處怪談の晰し本〕新板出来／宝永四〔辛／未〕載正月吉／大坂〔心齋橋南四丁目〕吉文字屋夏兵衛梓／江戸〔日本橋通三丁目〕同 治郎兵衛行」

旧蔵印 「山岸文庫」(複郭朱長方印)

識語 「絵本源氏物語ノ名称八国書解題中ニハ見エズ。」他